

ただいまからシンポジウム「〈具体〉再考 第1回 1950年代の前衛グループ」を始めたいと思います。本日は年末のお忙しい中、ご来場くださってありがとうございます。私は、企画を担当しました大阪大学総合学術博物館の加藤瑞穂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に簡単に開催趣旨を申します。お手元のチラシにもありますが、関西に生まれた戦後日本を代表する前衛美術グループ「具体美術協会」（略称：具体、1954-1972年）は、激しい身体行為の痕跡や生々しい物質感が特徴的な作品群で知られますが、その活動についてはこれまで、戦前との繋がりがあえるいは同時期の他の前衛的動向との関わりという観点から問われることがほとんどありませんでした。このような従来の解釈を複数の視点から再考する研究の一環として、2016年度よりシンポジウムを一年に一度、継続的に3回行います。今年度は、「具体」と同時代、特に1950年代に活動した他の前衛芸術家たちとの関係をテーマにし、研究者による発表・討議を通して、彼らの共通性ならびにそれぞれの固有性について考えます。

なお本シンポジウムは、平成28年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）課題番号16K02266「具体美術協会」再考-複合的視点から見直す戦後日本美術の一断面-）による研究成果の一部です。

このたびは、デモクラート美術家協会、実験工房、制作者懇談会といった、具体と同時代の前衛グループにお詳しい安来さん、佐藤さんにお越しいただき、それぞれのグループの特徴等についてご発表いただきます。そして、私が具体に1955年に合流した0会について、現時点で新たにわかったことなどをお話しし、その後、具体との比較など討議をいたします。

最初に、安来正博さんに「瑛九とデモクラート美術家協会」と題してご発表いただきます。安来さんは、1988-1999年、和歌山県立近代美術館で学芸員として勤務され、その後2000年より国立国際美術館に主任研究員としてお勤めです。和歌山の時期に企画担当された主な展覧会は、「アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち」（1997年）、「デモクラート1951-1957 開放された戦後美術」（1999年）、国立国際では「瑛九フォト・デッサン展」（2005年）、「草間彌生 永遠の永遠の永遠」（2012年）等、戦前戦後の日本美術について様々な視点から研究を重ねてこられました。

また、次に佐藤玲子さんより「『実験工房』と『制作者懇談会』-東京・戦後アヴァンギャルド芸術の展開から-」と題してご発表いただきます。佐藤さんは、川崎市岡本太郎美術館準備室を経て、1999年より同館学芸員として勤務されています。企画を担当された主な展覧会として「青山時代の岡本太郎 1954-1970」展（2007年）、「池田龍雄 アヴァンギャルドの軌跡」展（2010-11年）、「北代省三の写真と実験 かたちとシミュレーション」展（2013-14年）があり、一貫して戦後日本美術について研究されてこられました。

それではさっそくですが、安来さんに、続いて佐藤さんにご発表をお願いいたします。